

僕のかきの木

小川未明

青空文庫

もう、五、六年前のことであります。

ある日、賢吉は、友だちが、前畑の中で遊んでいる姿を見つけたから、自分もいっしょに遊ぼうと思つて、飛んでいきました。

「清ちゃん、なにをしているの。」と、立ち止まつて、声をかけると、

「赤かえるを見つけているの、君もおいでよ。」と、清次が、答えました。賢吉は、みようが畑の中へ入りました。

「赤かえるをつかまえて、どうするの。」と、賢吉は、聞きました。

「安田のおばあさんが、とくちちゃんに食べさせるのだから、つかまえてくれといったのだ。」

「とくちちゃんが食べると、鼻の下の赤いのがなおるから？」と、賢吉が、聞きました。

「きつと、そうなんだよ。さつき、一ぴき見つけたけれど、どこかへ逃げてしまった。」

「そのかえるは、真つ赤だった？」

「そんなに赤くなかった。」といいながら、清次は、みようがの葉を分けて、下をのぞいていました。みようがの子が、柔らかな黒土から、うす赤い頭を出して、白い花を咲い

ているのでありました。

「賢ちゃん、ここに、こんなかきの木が生えているよ。」と、突然、清次が、いいました。

賢吉は、そのそばへいつてみると、かきの木の苗が、みようが畑の端の方に一本生いで、大きな葉をつやつやさしています。

そこから、五、六間はなれたところに、太い親のかきの木が、立っていました。幾十年となく雨風にさらされてきたので、肌が荒れて、枝は、曲がりくねっていました。甘がきで、秋になると、実の上に白い粉をふいて、枝の先にいるいとしてみごとにたれさがるのでした。

「清ちゃん、あの木の子だね。」

「甘がきだよ。賢ちゃんにあげるから、持つていつて植えておきよ。」

清次は、力いっぱいその木を引っ張りました。すると、根は、深く入っていたとみえて根本から一、二寸、下のところで、ぽきりと切れてしまいました。

「あつ、切れてしまった。」

「惜しいことをしたね。」

「こんな、きんぼ根ではつかないね。」と行って、清次は、畑の外へ、その若木を捨ててしまつたのです。

賢吉は、じつとそれを見ていましたが、このまま枯らしてしまふのをかわいそうに思いました。また、助けて、つくものとすれば、神さまに對して、すまないことであると感じたのです。賢吉は、走つて行って、拾い上げました。

「清ちゃん、僕、この木をもらつていつでもいいの。」と、聞きました。

「賢ちゃん、うまくすれば、つくかもしれないよ。」と、清次は、自分が、手荒にしたのをべつに後悔するふうもなかつたのです。

賢吉は、往來を歩いて、日に照らされながら家へ帰ると、この傷のついたかきの木の苗をどこへ植えたらいいかと考えました。

「そうだ、お父さんに、相談してみよう。」と、思いました。父は、きつと考えてくれるだろうと思つたからです。

賢吉は、お父さん呼びました。あちらで仕事をなさつていたお父さんは、なんだろうと思つて出てこられました。

「甘い、大きな実がなるんですよ。このかきの木をもらつただけけど、どこへ植えたらいい

いですか。」と、賢吉は、父に、かきの木の子を見せるようにして、聞きました。

「なんだ、そんなことで呼んだのか。」といいながら、父親は、一目それを見ました。そして、あきれたというふうで、

「根がないじゃないか。人の捨てたものをもらってくるばかりがあるか。」といいました。

「僕、よく植えたら、つくような気がするし、枯らすのはかわいそうと思っただよ。」と、賢吉は、弁解しました。

「それには、時節がわるい。そんなことがわからなくてどうする。」と、父親は、不興げにいつて、かえつて、賢吉は、しかられたのであります。父親は、そのままどうせよともいわずに奥へ入つてしまいました。

「このかきの木を、清ちゃんに返そうか？」

考えれば、賢吉には、そんなことはできませんでした。

「いっそ、捨ててしまおうかしらん。」

そうも思つたが、いきいきとしている木を見ると、まだ命があるものを、みすみす枯らすことはなおさらできませんでした。また、最初から、助けてみようという気があればこそ、もらつて帰つたのですから、

「ほんとうに、お父さんのおつしやつたように、時節がわるいのだ。こんなに暑くなつたので、すぐ根が乾いて、枯れるかもしれない。」

彼は、前の畑をあちら、こちら、歩きまわつて、なるたけ日の当たらない、涼しい、湿気のある場所を探しました。そして、そこへ丁寧に植えてやりました。それから、根本へたくさん水をかけてやりました。けれど、後でいつてみたら、いつのまにか、木の頭は、力なくぐんなりと垂れて、ついている葉が、みんなしおれていました。

その明るる日から、彼は、この木を生かすために、毎日水を与えることを怠らなかつたのです。そして、とうとう五年めの今日、この木は、花を咲いてから実を結んだのでした。

「いつか、お父さんが枯れるといったかきの木が、三つ実をつけて、大きくなりましたよ。」と、賢吉は、父に向かつて、いいました。けれど、お父さんは、もう、あのとこのことを覚えていませんでした。賢吉は、なんとなく、さびしい気がしたのです。けれど、神さまだけは、知つていてくださつて、

「おおよくした。なんでも真心をつくせば、助からぬものでも助かる。」と、いわれるごとくに、かきの葉は、いま、風に吹かれながらいきいきとして円い実とともに光つてい

ま
し
た。
。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 12」講談社

1977（昭和52）年10月10日第1刷発行

1982（昭和57）年9月10日第5刷発行

底本の親本：「日本の子供」文昭社

1938（昭和13）年12月

※表題は底本では、「僕《ぼく》のかきの木《き》」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井裕二

2017年9月24日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

僕のかきの木

小川未明

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>